

アタッチメント研究と自閉症の発達支援

北海道医療大学心理科学部 教授
近藤清美（こんどう きよみ）



Profile — 近藤清美

1985年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。学術博士、臨床心理士、臨床発達心理士。ニューヨーク州立大学ストーニブルック校博士研究員、皇學館大学助教授を経て、2002年より現職。専門は発達心理学、臨床心理学。著書は『情動的な人間関係の問題への対応』（分担執筆、金子書房）など。

基礎研究も臨床も

私の専門はときかされると、「アタッチメントの生涯発達の研究」と答えるだろう。「でも、自閉症児の発達支援もやっていて、最近では、臨床が忙しくて大変です」と続けると、「へえ～、臨床もしているんですか」と変に感心される。

私のように、片方の足に「基礎研究」、もう片方の足に「臨床実践」という「二足のわらじ」を履いている心理学者は、珍しいのだろうか？

一般社団法人日本臨床心理士の第6回「臨床心理士動向調査」報告書（2012）によると、臨床心理士の中で、博士号取得者は11.7パーセント、大学等に勤務する者は17.0パーセントもいる。博士号があったり、大学等に勤務しているからといって基礎研究をしているとは限らないが、可能性は高い。臨床心理士が全国で約2万人いることを考えると、研究と臨床の「二足のわらじ」を履いている心理学者の数はなかなかのものである。

一方、この調査の中で興味深い数字を見つけた。臨床心理士の4本柱の業務の一つとして、臨床心理研究が挙げられるが、調査研究を行っている者が23.0パーセント、実験を行っている者が3.9パーセントであった。調査研究には実態調査といったものも含まれる

が、実験研究となると基礎研究に限定されてくるのではないだろうか。その数は、かなり少ない。つまり、臨床心理士として活動しながら基礎研究も行う心理学者は、珍しいと言ってもいいのかもしれない。

サルの研究から臨床の現場へ

私の場合、どういう経緯で「二足のわらじ」を履くことになったのかをお話しよう。

私が大学を志望したのは、子どもの悩みや親子の問題を解決できる方法を学ぶためだった。しかし、入学して、入った所を間違えた気がついた。そもそも、当時、臨床心理学という学問はないに等しかった。そこで考えたことは、なら、子どもや親子の心理学的問題を基礎から学ぼうと。ちょうど、生育歴によって子ザルの行動がどのように歪むのか、ハーロウ（Harlow）の代理母親を用いた一連の研究を学ぶ機会があった。こ

れだと思った。そこからサルの親子関係の研究に入った。大学を出るまで11年間、来る日も来る日もサルのことばかり、隔離飼育実験による行動障害の出現を研究した。隔離飼育をするので、赤ちゃんザルを、かれこれ30頭ほど育て上げた。そして、時々、野外のサルを見に行く。サルと一緒に山で過ごす。

そうこうして、サルの隔離飼育実験によって博士号をとると渡米した。ポスドクとして、研究活動に邁進した。そして、2年半後、帰ってきたら、職がなかった。残念無念。

本当のことだから言ってしまうと、心理学者に大学のポストがふんだんにあるわけではない。特に、動物を対象とする心理学者は、研究にお金もかかるし、分野も限られる。もともとサルから足を洗おうとは思ってはいたが、それでも



図1 テキサスのサルのフィールドで

職にありつけなかった。困った。

その一方で、現在でも状況は同じだが、臨床心理学の現場では、スクールカウンセラーや保健所の心理判定員など、非常勤職が多い。大学の職にありつけない状態で、なんとか糊口をしのぐには、こうした非常勤職に就くのが手取り早い。大学院時代から、バイト代わりにこうした職に就いていた心理学者も多いことだろう。

結局、私も知人の紹介で、保健所の心理判定員をすることになった。今日はこっちの保健所、明日はあっちの保健所へと。そもそも、サルの研究しかしてこなかったもので、すぐに、お里がばれた。そこで、本を読んだり、研修を受けたり、スーパーバイズを受けたり、猛勉強した。その勢いがあまって、臨床心理士の資格試験に挑む。知識のため込みは得意技。学会発表で弁舌は鍛えられ、面接でめげることはない。一発で合格した。

臨床していても研究もしたい

多くの方は、このまま臨床の道に進まれるのであろう。私は違った。臨床をしながら、クライアントさんがデータに見えてきたら、臨床家としてはおしまいだと思っ

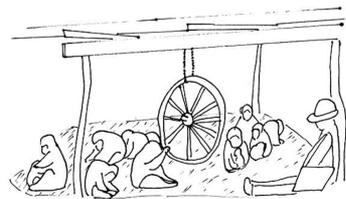


図2 サルと一緒に昼寝



図3 私のやんちゃ娘

たが、興味深い事象は目の前に広がっている。調べたいことがいっぱいある。

しかし、お金がなかったら研究はできない。また、研究仲間があってこそ、研究が進む。幸いなことに、お金は科研費をとることができてなんとかなった。やっと、人間を対象にアタッチメント研究をすることができた。また、研究仲間は、研究会に入出入りする中でネットワークが広がってきた。

ちょうど、臨床心理士養成校が雨後のタケノコのようにできた頃であった。博士号のある臨床心理士は分がよかった。やっと、大学に奉職することができた。大学の教員となると、業績の評価は研究発表の数ということになる。研究費も得ることができた。それで、研究活動を続けることになった。

このように、なぜ「二足のわらじ」を履いているのかと問われると、たまたまである。もし、帰国後、すぐに職が見つかったなら、研究者の道をまっしぐらだったかもしれない。しかし、もともと臨床にも興味があったのだから、結果は、同じだったのかもしれない。人生、やってみないとわからない。

二つの顔？ 舌は二枚あるけれど

この小特集は、二つの顔を持つ心理学者ということだが、原稿を引き受けるとき、「おいおい、私の顔は一つだよ。舌は二枚あるかもしれないが」と申し上げた。

臨床心理学の実践は、基礎心理学とは考え方も方法論も全く異なるとおっしゃる方がいる。一般的には、そのように臨床心理学の営みを見ている方が多いかもしれない。その立場に立つと、基礎研究をしながら臨床をしていれば、「二つの顔」を持つことになる。

しかし、私は、「二足のわらじ」を履いているとは思いますが、どちら

の仕事をしていても、向いている方向は同じなので、「顔は一つ」と思っている。それは、基礎研究であれ、臨床実践であれ、心理学の成果に基づき、心理学的理論と方法を用いている点では、違いを感じないからである。

私の場合、アタッチメント研究という、母性的養育の剥奪という臨床的興味から出発して理論がたてられ、基礎研究の積み上げの上に、今や研究成果の臨床的応用が盛んになされている分野にいてことで、基礎研究と臨床実践の間に乖離を感じないということも一因かもしれない。

そもそも、臨床実践を行うのに、基礎研究に依拠した理論や知見なくして介入方法を考案できないし、介入効果の評価についても、心理学的方法が不可欠だとするならば、基礎研究を行っていても、臨床的介入を行っていても、向いている方向は同じである。

ただし、舌はいっぱいあると思う。クライアントさんは、特定の心理学理論や介入技法のためにあるわけではない。まず、「すべてはクライアントさんの利益のために」。主訴を真摯にお聞きして、その解決のためにうまくいきそうな技法だったら、私の力の及ぶ限りで、何でも使う。だから、臨床において、私はアタッチメントのことばかり考えているわけではない。クライアントさんのアタッチメント関係も視野に入れるが、まず、目の前の問題を解決することである。だから、行動療法も大いに取り入れ、ペアレント・トレーニングもする。時によって言っていることが違うから、二枚舌だと思うし、クライアントさんに応じて舌が増えていくような気がする。しかし、心理学者としては「一つの顔」だと思っている。